

センターの更なる発展を願って

工学部長 江見 準

昭和46年に、金沢大学計算機センターとして工学部キャンパス内に設立されて以来、25年間金沢大学の教育研究、管理運営全般にわたって重要な役割を担ってきた総合情報処理センターの建物が来春、角間キャンパスにおいて統合・拡充されることは、21世紀に向けてさらに飛躍をはかろうとする金沢大学にとって誠に喜ばしいことであります。尤も、全学利用者の6～7割を占める工学部教職員・学生にとっては、四半世紀にわたって慣れ親しんできたセンターが遠くなることで不便になるでしょうが、工学部では、移転後の建物の一部を分室（仮称）として残し、利用者の便宜をはかることで解消することを考えています。

さて、現在は高度情報化社会といわれるように、ハイテク機器から玩具まで超小型の電子部品が組み込まれ我々の日常生活に深く入り込み、特に情報通信分野の発展は目覚ましいものがあります。しかし、この分野の進歩の歴史は高々35年程度です。これだけの期間で我々の生活スタイルをも変えるような技術分野が世界の歴史の中であったでしょうか。35年前の1960年は私は大学生で卒業研究に専念していました。計算尺を片手に、卓上にはタイガーの手廻し計算機とかモノロー電動計算機を置きデータの整理をしたものです。私が在籍した京都大学ではその頃電子計算機の1号機（KDC-I）が導入され、修士課程の時、一般研究者にも開放されました。当時私は空気中に浮遊する微粒子をエアフィルタで除去する研究に従事しており、フィルタ内部での粒子の運動を知るために、どうしても非線型の連立微分方程式を解く必要がありました。Runge-Kutta-Gill法を使って手計算でワンステップの計算をするのに2時間以上かかっていたのが、KDC-Iではわずか数秒しかかからなかったときの驚きは今でも忘れられません。

KDC-Iは1963年に本理学部に初めて設置されたNEAC-2230と同程度と思われ、幅5m以上もある大型コンピュータでしたが性能からいえば今のパソコン以下、ポケコン程度だったように思われます。今から思えば、1960年頃は真空管からトランジスタへ移行して間もない時期であり、チップの上には数個のトランジスタしか乗らない時代だったのです。その後の集積回路の高密度化により、今や100万個以上のトランジスタを組み込むことが可能となりサイズが10兆分の1になっていることを考えれば、コンピュータの超小型化、高性能化のすさまじさが理解できます。ご承知のように平成3年7月に大学設置基準が改訂され、全国の大学で国際化、情報化、高度化、多様化、総合化などをキーワードとして大規模な改革が行われました。本学では教育改革を組織改革に優先させ、平成6年度から4年一貫教育を柱とする新カリキュラムが実施されていますが、改革の目玉の一つに情報処理教育の充実が挙げられます。工学部では早くからセンターの情報処理教育専門委員会の協力の下に、1年前期に「コンピュータ基礎と演習」を全学生対象に開講することを目標に、当面は工学部全学生を対象に平成6年度から情報処理一貫教育をスタートさせました。新しいセンター建物が完成しますと、実習室を始めとする教育諸施設設備が完備され、ますます充実した教育が行われることが期待されます。さらに、将来的には、インターネットを利用した多様な社会人を対象とした生涯教育が双方向的に実施される日も来るでしょうし、新しい時代へ向けて本センターが大学の本来の目的に対して先導的役割を果たされることを願っています。

最後に、センター長、センター職員の方々をはじめ、教務情報、入試情報など教育・管理事務に奉任いただいている教職員の皆様に紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。